

淋しく弱く生きて侍り。うなだれて行く吾が影を哀ども見給へかし。あまり多くを人に求めぬ。されども人は遂に人なりき。眞の吾は吾のみ知るものを、如何に親しければとて、人は遂に人を知らじ、悲しみにえ堪へぬ時、人は言へり。樂しくも君の見え給ふかな」吾は、淋しく笑みてありぬ。

「孤獨なるものよ汝は吾が住居なり」雨蕭々の山中を駆け廻りつゝ、叫びし人のなつかしきかな。孤獨は人の永遠の悲しみかや。

影の人は再び言へり。「強く生きよ！淋しく強く！凡ての事強ければ可なり」と影の人は影の如く去りて跡もなし。

美しき、多くの夢を見るがごと、月はおぼろに、風強うして、遠方に、蛙の聲しきりなり。

路傍より

三年 うき代

六月のある日、五月雨が二日ばかり快い碧空を見せて、涼しい風が新樹の梢を鳴らしてゐる氣持のよ

い朝であつた。

いつも初夏の頃に感ずる、ある漠然とした明るい希望、生命の流れに感じられる力、そんなもの、一面に、或る一つのもの、を焦點にして悲哀が、野の草の様に廣くはびこつた、その中に私は居た。五本の指を髪の中に突込んで、熱と頭を押えて眼を瞑るとはてしなく涙が流れる。私は悲しい出来事を郷里の家を持つてゐて、それは絶えず私を、現實にもつと強く、確りしなくてはならないと、勵まし促がしあふる力の要求をすらしめてゐた、其は悲しみの中で悲しみであつたけれど、その考から成る可く避けるやうに。私は暗い沈んだ胸から頭を離してうち仰いで光をうけることに努めてゐた。寂しさを振り落す様に眼を擧げて熱と灰色の壁を見詰めてゐると、また心が視覚と次第に離れて行つて瞳の先には鈍い光線が映るのみだ。過去を葬り現在をも否定し勝ちに未來へ未來へと憧憬がれて流れて行く生活、可なり努力と焦燥とに苦しみ乍ら實生活の上には棒片れの様

の如く清く尊い人の子を教育すると云ふ重い大きな將來の任を持つ借越さ、凡ては咎めらるゝものばかりであつた。統一を求め結着點を期待して努力する私は、結果は原因になる許りでいたちごつこの様に輪の周りを驅けるのであつた。もう絶望だと疲れ切つた時に思つた。併しまた遂々こんな事を考へ出した。この絶望の状態になつた吾々の生活は應て再生すべき吾々を見出す時に遭遇したのではなからうか、生活の倦怠は一面から云へば更に其は直ちに大なる欲求の表現である。それは産婦の苦痛に同じく其の瞬間とを過ぐれば喜びと安樂の來る事の可能性を信じ得るものではないだらうか。勿論この可能性の信があつても絶望の苦は減じないが大きな慰藉となるのである。この絶望悲哀の境地に明かなる自己を見出して在らんとする努力が寧ろ自分としつとり合つて心嬉しいものではないだらうか、運命説神秘説と云つても、私はおもふ。この不可抗な力、運命の翻弄と云ふことが決して其の人にどつては凡ての否定ではなくて、矢張り不可抗な力も、自己の中に渾一することが出來、其運命説に同感し得た時には其

は決して不可抗な力でなく其人の生活圏内に入つて其生活意志を意味づけられたものでは無からうか。吾々はこの生活の絶望をしつとり自分の内心に味つて見なければならぬ、決して輕卒な態度でなくて謙讓の心持を以て深く考慮して見なければならぬ。さもなくば生活の絶望は、只生活を危險に陥らしむる自己呪咀の凡てともなり終るであらう。その結果としての苦しい境地から超脱せん日を、禱るべきである。私は充分その可能性を信ずることが出来る。小さな過去の經驗の中に、充分これを豫想せしむべきものを持つてゐる様に思ふのである。私どもの生活が今后どんな形で迫つて來るか、豫想は出來ないけれど、如何なるものも吾々を、更に強く深くならしむべきものであることは、充分信じてよいではなからうか。この様な考へは、私を更に生活の次の一歩に奮ひ起たせた。

人を怖れ、自らを隅に消すにして居て、どうしてこの先の生活が出來やう、自由の時間を有し、孤獨の境地に置かれた時、果してそれだけの統一と、慰藉とを得たことだらう。自分の無能が人を恐れさせ

るのだと思つた時、其が何等の行爲の力とも決心ともならない、いつかこう思つた時私は、自分の將來行くべき道に就いての、ある光の閃を得た様に感じたのである。併し拭つた鏡面よりも、更に曇り易い心は、一度決められた通りに、何時までも單純には行かなかつた。この朝も、灰色の壁の意識が、私の頭に恢復するまでには、大分久しい間、低い自分の凝視と、對抗とがあつたのであつた。

『烈しい咳の苦しみの一月、座つたなりで惱んだいたましさ、それを今は全く超越して、早苗さんは蠟石の様な神々しい姿で瞑目されて居ました。身も心も清い乙女のまゝに終られた、幸を羨しく思ひました。亂れの臨終も美しかつたそうです』

またこの文句が胸に浮んだ時、その刹那壁の色が眼に入つて、私は堪へられないで起ち上つた。親しいそして敬愛する、友の死から受けた感銘、學校を出てから、その優れた人格と、清い心で幼い天使の群をよく育て完うした友の、清らかな死、その生涯の尊さ、を考へた時に私はたゞ自分の、全目標全理想をこれにさだめて、其の清い單純な心持のうちに

と生命力の無限の伸長、これ等が不斷に流れ纏れて都會は大きな渦巻となつてゆく。

日頃全くこの社會とは交渉のない、安らかな區域に住んでゐる私は、これ等のものに接して、ある力の驚異と歡喜とを感じつゝ、行人の一人となつてゐるのである。嗚呼憐れにも、見窄らしく小さい自己よ。大都會の可抗し得ぬ力、咀はれたる歡喜の前に今まで抱いて居た、問題の如何に些少のものに思はれる事よ。白日の下に廣い街の歩道を、薄いノートと鉛筆の包みを持つて、洗ひざらしの紺飛白を着て、ぼつねんと歩いてゆく、自分の姿がはつきりと意識されてゐた。稍人通りの少くなつた、公園の廣場の木立の下に、赤坊を負つた、いが栗頭が二人、手拭で括げた鬘や曲尺を提げた職人、カーキ色の兵士、中年の女などが五六人集つて、種々の表情で何か見てゐる様子である。通りすがりに見れば、頭髪を分けてフロックコートを着、右の手首に數珠をかけた三十位の紳士、それは布教師であつた。額から頬に滴る汗、人を見ずにそこなく、凝視した眼の光に熱意が溢れて、緩徐な調子が次第に高調して來

自らの境地の意義をも、發見したのであつたのだ。

この心に到達し、またそれを續け様とする努力は、今までの何に於けるよりも、眞摯にせられて居つてそれには上の數言が、いつも聖句の様に、心に閃いてゐた。

それで私は、この朝もこの言葉が頭に浮ぶや、邪念から逃れやうとして、起ち上つたのであつた。

久しく外へ出なかつた私に、都の街は快い夏の新鮮な感じを與へた。白紺などを着た道ゆく人の軽い足どり、薄色の絹の美しく日に輝くバラソル、飛ぶ様に驅ける俣の涼しそうな黒紗の帳、宏壯な邸の庭等の高い楯に見られる、強い緑色の刺戟、それらは今まで沈滞して、鬱々しく屈んで居た、私の心を耻しがらせる程、明るい夏の空の下に、自由に愉快そうに伸々してゐる。

石で疊んだ鋪石の上を、間斷なく行きかふ電車や自動車、大きな建物、さらびやかな飾窓、新聞賣子の威勢のよい呼聲、東都はごこまでも人間偉力の表徴である。この頃は殊更に高調した人間美が、至る處に色彩を添へて、争闘と權力、歡樂と耽美、藝術

で、徐ろに思想の中に、突入してゆく様子に見られて、歩みを緩るめて耳を傾けて見る。

『先づ十一月の釋尊の、佛成道に考へを及して見ます』と、佛成道の瞬間、天上天下唯我獨尊の叫びの刹那の、釋尊の心を想像して述べて、『吾々の心に佛性が、小我の生活に混入して、存在するものであつて、この佛性が小我の生活のうち勝つて進む時に、遂に眞如の世界に到達するのである。この眞如は宇宙の眞理で、何萬年の昔より、何萬年の未來に變せぬ絶對の如是、不如二の境地であつて、釋尊がここに到られた時、天上天下唯我獨尊と宣うたのである。これは、天上天下の間に吾唯孤りと云ふ意味でなくて、萬人の中に存在する、佛性の何物にも犯されず、また尊きその絶對のものを悟り、眞如の世界に到達されて、その佛性を極度に、讚美された時の心持の表現である。

釋尊が佛成道の後、觀せられたのは、太子の高位宮殿の歡樂、妻子の情愛を捨て、萬民の嘲笑と呪ひをうけ乍ら、唯専ら惡戰苦闘して、この絶對の境地に達したまで、すべて眞の自力で來たのであつた。

併し眞如の境に至つて過去を顧れば、既に否定し來つた一切のものは、この境地に達した援護となり、刺戟となつて、凡べて自分を助長して呉れたのであつて、一切のものを離れては、此の眞理には到達し得なかつたであらう。かう思つた時、既に否定して來た一切に、云ひ知れぬ感恩の念が、湧き上つたのであつた。そしてその感謝の念が、即ち他力の偉大なことを思はしめた、即ち感恩の結果、一切に對する慈悲的活動が出來たのである。即ち佛教は、自力的に偉大な意味があると同時に、他力の意味に至りて、更に偉大な價值を有する。實に如來の「如」は自力によりて行かれた状態、「來」は再び戻つて、慈悲的活動に返られるのである。

自分が今迄皆自力で出來たと思ふ事が、必然性は一切が助長したもので、偶然であつたと考へた事が必然性のもので有つたと悟り、偶然の必然化を感じ給ひし時に、釋尊は一大傳導に向はれたのである。その凡べてが、必然性である。と思はれた時に、其處に責任と權威とを認められ、そこに大傳導の生涯が初つたのである。

ことも、すべて必然おこるべきであつたのである。そこに感恩となり、傳導となり、救濟となるのである——」

自分もいつか足を停めて傾聴して居るのに氣付いて、驚いて又すたくと歩き出した。

佛の讚美、鼓吹、勸進、の幾多の言辭の中から、腦裏に印象された、ヒントをもとにして、私は或は誤つてゐるか知れない解釋を以て、以上の様に抽象し敷衍して見た。俯向いて行く頭の中に、先刻までとは變つた種々の思ひがみちて居た。現代の複雑した思想界に立つて、自分達は概念の誤解や、大なる理論をうち捨て、小釋尊たらんとする所に、如何に大なる福音や、意味があるかも知れない。高位、高僧でなく、唯小なる、さゝやかなる釋尊の境地こそ、まことに、唯一の救濟ではないだらうか。これは私の紛糾した心の中にある深い意味を示した。小さな生活に於ける、様々の否定は渾一した大肯定の出現を、期待することが出来るのではないか。人も、ものをも、愛し得ざるの悲哀は、私の常に感ずる恐るべき罪惡ではなく更に眞の愛の豫言である。

宗教は「偶然の必然化」そこに力を見出し、權威を見出すのである。釋尊弟子に説いて「吾は既成の佛なり。汝等は佛にならんとする身なり」と。否定は更に大なる肯定を生んだのである。

佛性には一面向上の精神と、一面他力の力を同時に認められ、自力のみでは徹底し得ない。自他共に渾一化せる處に宗教の意義がある。自覺と救濟との共に發する處である。或人が長年外國に留學して、歸朝すると同時に博士號を勝ち得た。多くの人が彼の榮位を得たのを祝福し、彼は堪らない歡びに充たされたのである。博士は思はず過去を顧つて見て、全く自らの力、その刻苦精勵によつて、此の榮位を得たのであると信じたのではあつたが、偶々、父母の墓前に立つた時に、「阿父さん！」と云つて墓に絶りついたら云ふ。即ち自分の力で斯うなつたと信じられた博士の、その嬉しさその榮位が、自らの力以上のものに、感謝せずには居られぬ様な心持の溢れが、親への感謝となつたのである。今まで自力と信じたのが、全く他力に感謝せざるを得ない、境地に到つたのである。即ち偶然の必然化、偶然起ると思つた

この卑しく弱い自己に反逆せんとする心持は、讃同せんとする前程で、しかも強き讃同に進うとするのである。吾々にはまだ「自力に依り苦しみつ」、自己開展をしなければならぬ。こゝに至つて、日頃の苦悶は、寧ろ有意義のものとなり暈つたのではないか。

さゝやかなる私の境地には、幽かな安らひと、ほんどに清い心、それには、尊い自分の將來の職に對して、ある可能の曙光とも、見るべき力すら思はれる様で、僭越の責めも生活の動搖も、今までの様にそれをそのまゝ、苦にすべきものではないと思つた。それは過程に於てある。様々の苦みも恐れまい、否定も否定、そのものを悩む必要はない。ある境地は私にも待つて居るのだ。たゞ安らひのある清らかな生活はそれだ。併しそれには、前に考へてゐたよりも、もつと深い意味と尊い値の拂はるべきものだ。そして私は、ある快い氣持には、えみ乍ら歩きつづけた。元氣のよい男達や、華やかに盛裝した女達が、私の側を數多く通る。それらに前程に一々驚かうともせず、ゆきの短い單衣の袖の輕いのを嬉しく

感じ乍ら、歩き心地よく耗つたこの下駄を、夏休みまでは穿きたいものだなごと思つたりして、靜かに葉櫻の繁みの下蔭を辿つて行つた。

沈靜の底より

三年 茂里子

「たう／＼夏がまゐりましたのね、」さう親しい友への手紙を書き出して、私はそつと目をうつししました。雨がしと／＼と、窓際のつげの木に降つてゐます。その生き／＼した新芽にも、そして固い、くろすんだ幹にも、同じ様に緑の雨が靜かに降つてゐます。

「この雨が晴れたらあの強い光の時が来るのだ。」かう思ひ乍ら、私は窓に手をかけて、やはり外を見つめてゐました。

かなめ垣の外を傘を傾けて、小さい女の子が通りました。庭たづみにゆら／＼と振袖がうつると、紅と緑の浪がもつれあひました。お琴のお稽古にでもゆくのでせうか。紅い帯をきちんとおはさみにしめた後姿が、垣の角を右に曲ると、見えなくなりまし

た。それで私は、

「私の窓の前にも夏が見えます。雨の中を小さい女の子が通ります。」と書いて、すぐ「紅い帯はい、ものですね。」とつゞけやうと、筆を執りました。その時ふと、私を呼びとめた、小さい、白い花の姿が腫の中になゞよふ緑と紅との上に、くつきりと浮んで來ました。

「何だらう。」かう思ふと、又書くのを止めて、私は窓から首を出してみました。

雨だれおちの所に雪の下が咲いてゐるのでした。小さい子のリボンのやうな花が、雨だれの響にふるへ乍ら咲いてゐるのでした。

きつと一日中雨が降つてゐれば、一日中この花はふるへてゐるのでせう。

私はもう手紙も何もかきたくありませんでした。誰かを呼びかけて、このふるへからひろがつて來る心のゆらぎを皆きいて貰ひたい、と思ひました。

「い、ん、それでも私の望むすべてではない。」とうらぎる心の叫びが、遠く／＼消えて行きました。と、いひしらぬ沈靜の奥底から、「ほんとうの祈り

の捧げられる時」といふ、細い、幽かな、清い、朗らかな囁きをききました。

みちばた

一年 善子

みちばたに、私といふものが此處に居るので、とも何とも言はずに、小さい草がそつと咲いて居る。

ともすれば、心ない人に踏まれても了ひさうなあぶないみちばたに、それでも、春の色を淡緑に見せて、可憐にふるへて居る。何と言ふ名か。知らぬ。

植物學者の目にもとまらず、ただ塵にまみれて、花もつけずに、生きては枯れる名なし草ではあるまいか。小川のはどり、野の末に、生える小草を、あはれだと、人はいふ、心をとめる者もない往還に、そつと咲いて戦いて居る此の草を、何といはうか。あはれとは、あまりに軽い言葉である。電車の轟、荷車の音、雜然たる音響に、はげしく邊りは、動いて居る。さうして、だあれも、此の草を知らないのだ。草もだまつて、ひそ／＼と生きて居る。

一年 かつ子

この間の晴れた日に、地理教室から直白な富士を鮮やかに見得た私は、九段を歩いてゐた時にふとその事を思ひ出した。九段から富士が見えるぞ聞いてゐたので。

で、其の方角を見たけれども、雲ばかりである。今まではたゞ、今日も見えないなど、それ以上氣にも止めなかつたが、一度はつきりした姿をみた私はそれではすませなかつた。雲があるから見えない。あの雲がなければ！

いや雲のあなたに、富士は何時もあの姿であるのだと思つた。

◎笑 顔 終 江

運動會の日であつた。焼けつく様な陽を受けて砂はきら／＼と光つてゐた。乾き切つたカラウンドへ水を撒く爲に年寄な小使が車を引きまわした。車が重いのでよ／＼と歩く様子が可笑しいのか皆が一度に／＼と笑ひ立てた。すると小使も同じ様に一所になつて笑つた。質朴な無邪氣な善良な笑顔であつた。私は涙の浮ぶのを感じた。